25年の時を経て、
門司港駅前が新たに生まれ変わる



門司港・関門エリアへの追い風

門司港レトロ地区の観光客数（2025年）

265万人

門司港レトロ展望室の来館者数

23.4万人

（過去最高） 開館直後除く

GREEN DESTINATIONS TOP 100 2025 STORIES

世界の持続可能な観光地TOP100

（デスティネーション・マネジメント部門）

世界第3位




旧JR九州本社ビル、
25年ぶりに始動

北九州市との深い縁を、門司港の歴史的資産を未来へ

受け継いできたもの

北九州市との
長年のまちづくり

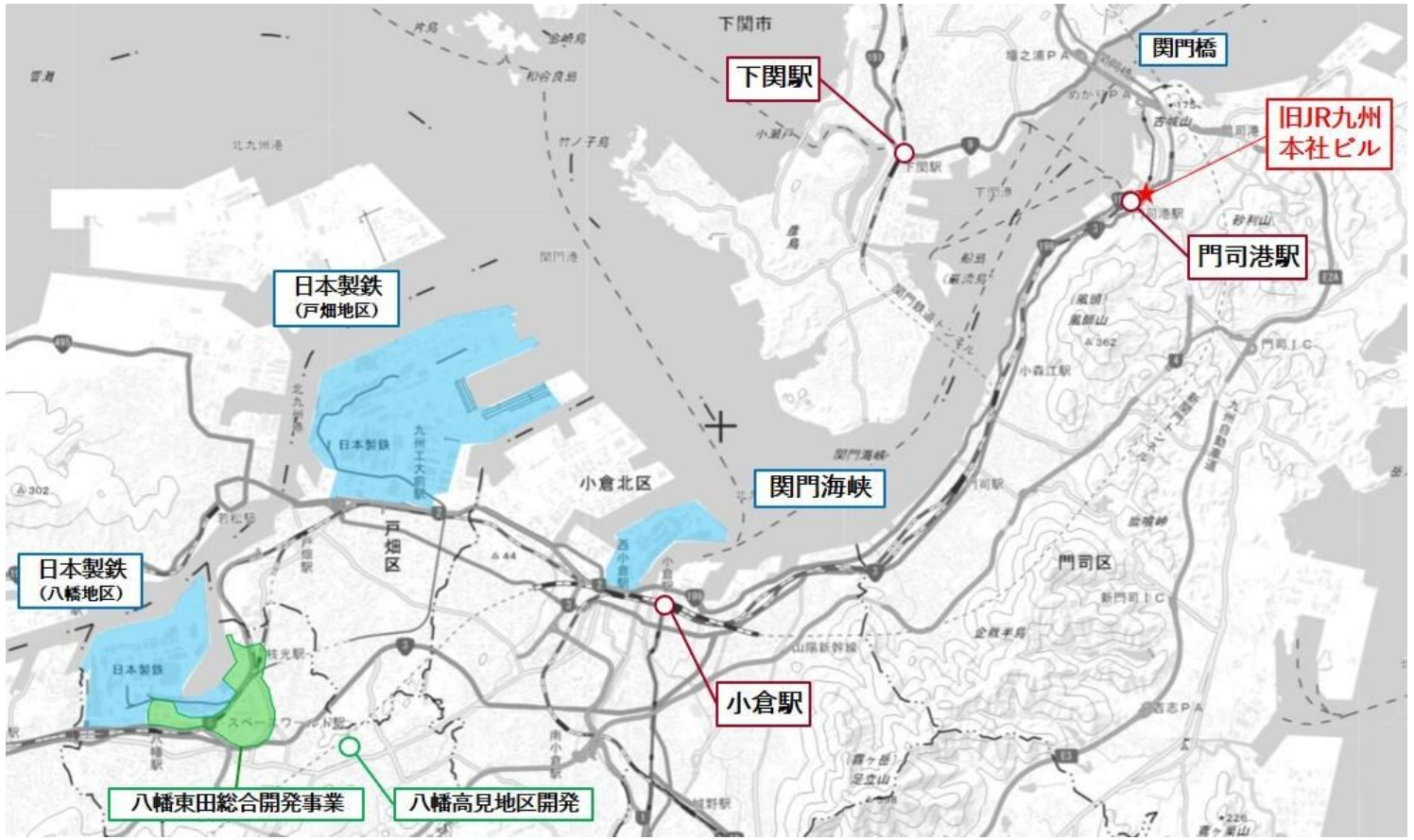


八幡東田総合開発



八幡高見地区開発

新たな交流と事業を生み出す



地域とのつながりを活かし、門司港に新たな交流と事業を生み出す

門司港に新たな滞在需要を生み出す「マーケット創出型ホテル」

観光資源：関門海峡
集客ポテンシャル

滞在型宿泊施設不足
“泊まらない”のではなく
“泊まれない”

滞在時間
コト消費の設計

3つのポイントを踏まえた事業の最適解

▼

歴史的建造物を活用して泊まること自体が目的となる
『マーケット創出型ホテル』を計画

（総工費：約60億・2030年1月開業予定）

エリア親和性、観光にぎわい創造、
既存ストック再生（本建物理解）に強みのある体制

人と向き合い、街をつくる。
日鉄興和不動産
代表法人/不動産開発

北九州市で地域に根差した持続可能な街づくりを推進する日本製鉄グループの不動産デベロッパー

Staple
構成法人/ホテル企画開発運営

人口減少下でも**“旅の目的地”と“豊かな生活圏”を両立**させることで元気な地域を育てるホテル運営者

MHS 松田平田設計
構成法人/設計

本建物の元設計者の松田軍平が1931年に創業した組織設計事務所の草分けであり、**豊富な実績と総合力を備えた設計力**

YMFG ZONEプラニング
構成法人/金融・地域連携

地域とリスクを共有し価値を共創する同舟共命型のまちづくりを推進する地域課題解決プラットフォーマー

旧JR九州本社ビルを、
門司港の新しい旅と日常の拠点へ。

ホテル・飲食・カルチャー・自然が重なる複合施設として再生

海峡の旅と日常が結いあわさる。

門司港は、海峡を挟みながら
人や文化、価値観が行き交い、
結いあわさってきた港町でした。

西洋と東洋、
都市とローカル、
日常と特別。

この場所には、
どちらかに分けるのではなく、
融和されたかたちで積み重なってきた
独自の文化と美意識があります。

本事業が目指すのは、
その在り方を現代にひらき直すことです。

駅前広場とテラスは、
子どもたちが駆け回り、
犬の散歩の途中に立ち寄る日常の風景であり、
朝市が開かれる日には、
広域から多くの人が集い賑わう。

数十キロ圏内の食材を活かしきる
ここでしかできない食卓が、
地域の食の可能性を少しずつひらいていく。

小倉や下関のカルチャーを担う人々とともに
ショップや場をつくりあげ、
本建物の屋上には
ビオトープという小さな自然が立ち上がる。

それぞれの風景が、
訪問者と地元民を、
生産者と消費者を、
日常と特別を、
海と山を、
ゆるやかに結いあわせていく。

ホテルは、そのすべてを束ね、編集し、
世界へとひらいていくためのメディアです。

ここから立ち上がるのは、
海峡の旅と日常が結いあわさる風景。

観光と暮らし、特別な日と日常が自然に交わる場所。



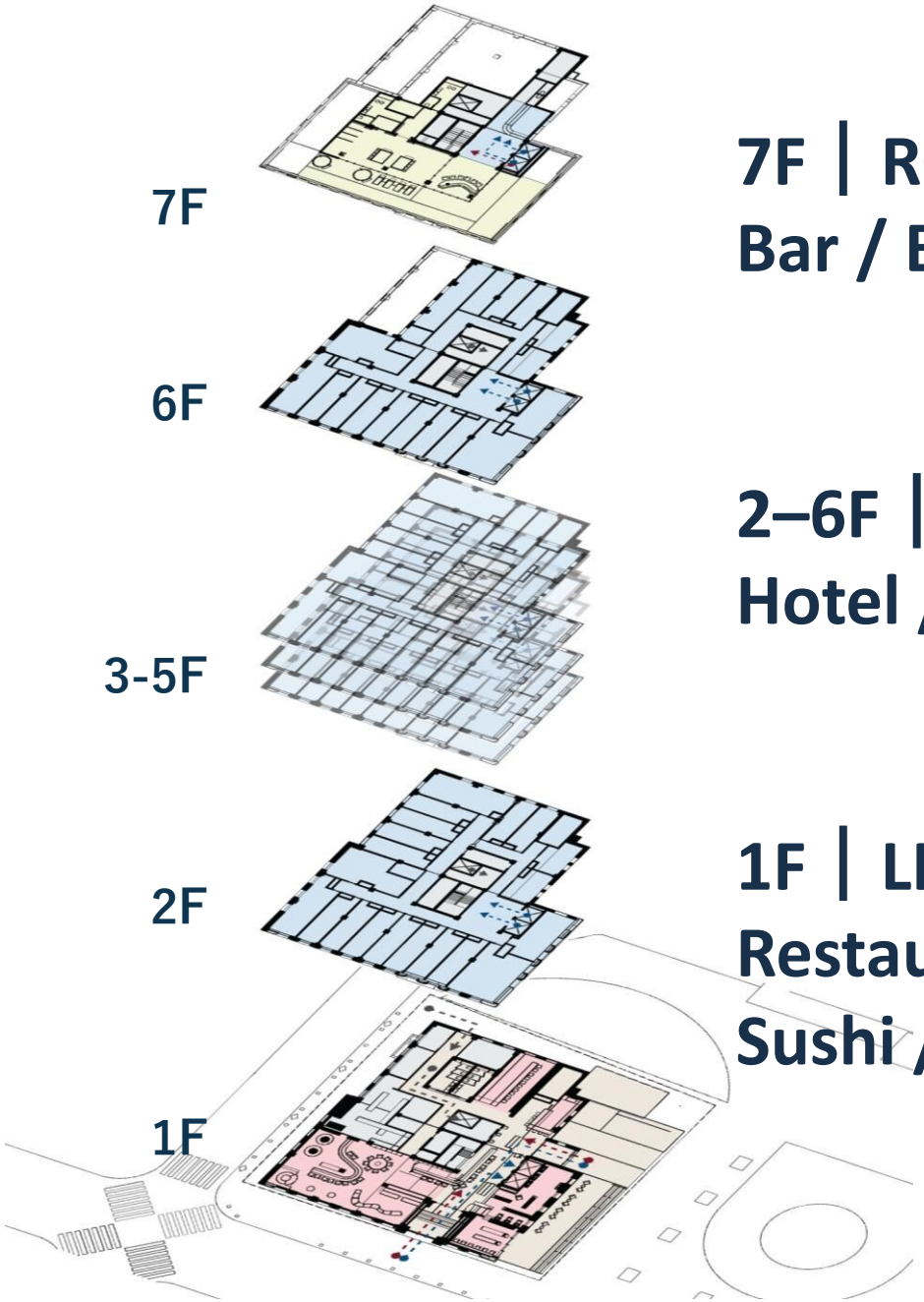


朝市



屋外シネマ


ジャズフェス



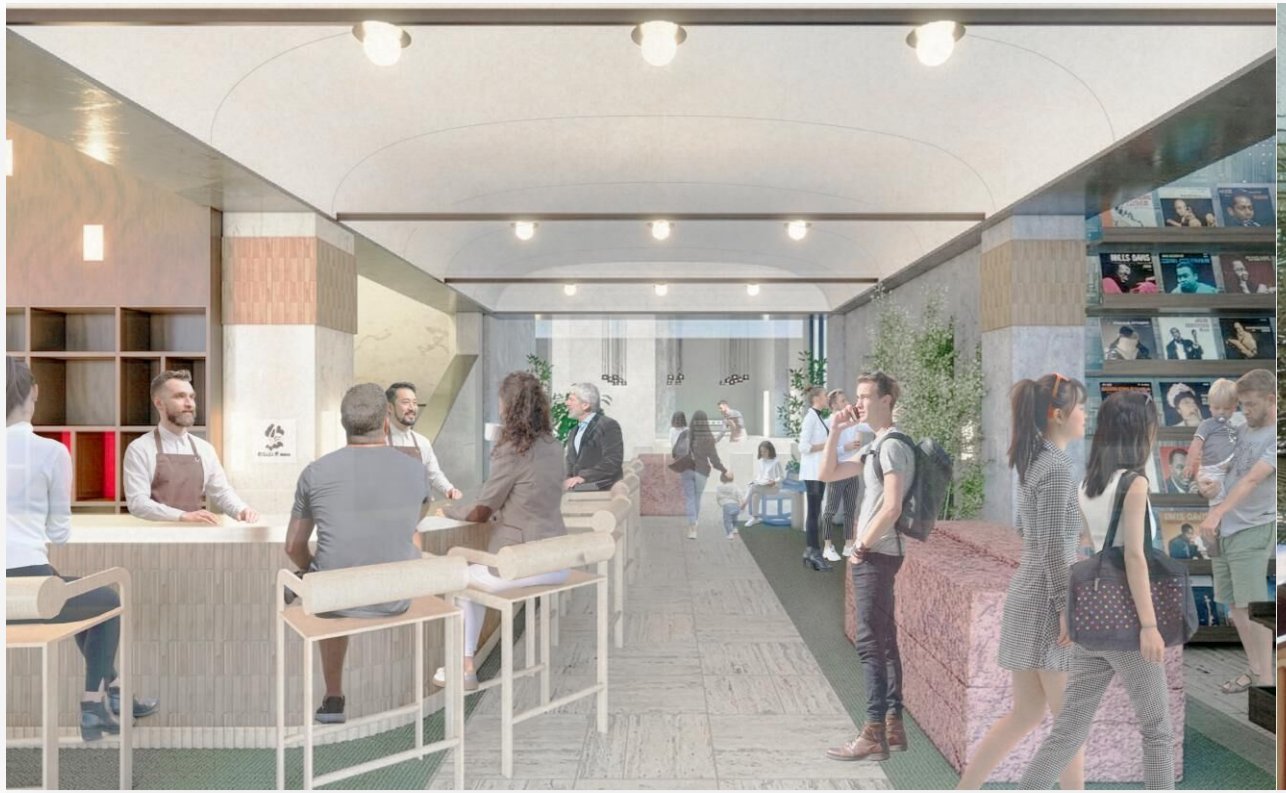
7F | ROOFTOP SPA
Bar / Biotope / Sauna

2–6F | STAY
Hotel / 97 Rooms

1F | LIVING ROOM
Restaurant / Cafe / Reception /
Sushi / Vintage / Records / Plaza

1F「門司港のLiving Room」

広場とつながるカフェ・飲食、内部ストリート、古着、レコード
宿泊しなくても来られる。
コーヒーを飲む人、買い物をする人、旅人、近所の人が同じ場所にいる。





デザイン

海外に立脚しながら日本的デザインを再解釈した門司出身デザイナーをインテリアデザイナーに起用

｜WAKAWAKA　奥田慎一郎
福岡県北九州市出身、門司育ち。1997年に渡米し、ロサンゼルスを拠点に活動中。





インテリア作品例





客室イメージパース

旅の目的地であり
門司港の日常でもある場所へ

この建物を目的に門司港を訪れる人が増え
そこで地域の人や店と出会い
小倉や下関へも旅が広がっていく。

地域の人にとっても
日常的に使いたくなる場所になる。

そんな新しい門司港の風景を
つくっていきます。

